
The bonds of S

バクフーン & Lino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The bonds of S

【Nコード】

N2551J

【作者名】

バクフーン&Linno

【あらすじ】

平和だったある日、妹が誘拐された！

これはそんな境遇に陥ったあるポケモンと、その仲間との絆を描いた物語である。

S - 1 兄の二面性（前書き）

バクフーン

「どうもです皆さん！ バクフーンです！ 新年を迎えたという事で、Linoさんと一緒にコラボ小説を執筆する事に！」

Lino

「皆さんこんにちは、Linoです。今回、何とバクフーンさんと共同合作というものすごい事を始めてしまいました（笑）」

バクフーン

「お互いにネタを出し合った事により、かなり楽しく執筆する事が出来ましたよ（笑）」

Lino

「というわけで、新連載……」

バクフーン & Lino

『スタート！』

S - 1 兄の二面性

「はいもう一枚いきま〜す。次はちょっと斜めに向いてくれるかなあ？」

「こっか？」

とあるスタジオで写真撮影を受けているポケモンが一人。青と白を基調とした体色、戦闘機に似た姿をしたドラゴンタイプのポケモン……名はラティオス。

彼はこの世界で有名なポケモン雑誌“ポケキャン”の専属モデルなのである。

「おっ、良いねえ……んじや〜右手を顎あごに当てて少し格好良くポーズ決めてくれる？」

「わかった」

カメラマンのバリヤードが指示すると、ラティオスは言われた通りにポーズを決める。さすがはモデル、どのポーズでも美しさは紅一点だ。

「おっ、良いね良いねえ！」

様々なアングルからラティオスを撮るバリヤード。フィルムが巻かれる音が加速する。

ラティオスはポーズを決めたままカメラを見つめる。もちろん表情は笑顔だ。スタッフでさえ、彼の笑顔に惚れ惚れしてしまうとか。

「……はいOK！ 今日も良いのが撮れたよ！」

良い写真が撮れたようで、バリヤードは満足そうにしている。鼻歌を歌いながら撮影機材を片付け始める。

「ふう〜……」

ずっと同じポーズだった為か、少し疲れた表情をするラティオスであったが、その表情も格別にいいとバリヤードは言う。

「今日も良かったわよ〜ラティオス君」

そんなラティオスに歩み寄るポケモンが一人。

緑を基調とした体色で、人間に近い体型をしたサボテンのようなポケモン、ラティオスのマネージャーであるノクタスだ。

「やっぱりあなたは“ポケキャン”のトップを飾るに相応しいポケモンだわ〜」

「それはどうも」

テーブルに置いてある水が入ったペットボトルを手に取り、一口水を飲むラティオス。言われ慣れているせいか、無表情で答えた。

「そういうクールな所も、素敵だわ〜」

クールなラティオスに惚れているノクタスは両頬を押さえて体をくねらせる。ちなみにこのノクタスは女口調ではあるが立派なである。

「……マネージャー、そろそろ帰っても良いか？ 家で『あいつ』を待たせてるんだ」

今日の仕事を終わらせたラティオスはマネージャーに帰っていいか尋ねる。

「良いわよ。こんな素敵なあなたというなんて、あの子も幸せ者ねえ」

「じゃあ、お疲れ様」

ラティオスは半ばマネージャーの言う事を無視するようにスタッフ達に別れを告げ、スタジオを出る。

「……さて、待ってるよ……ギザカワユスな俺の妹よ」

スタジオから出た途端、今までクールだった表情が一気に緩むラティオス。

仕事では絶対に見せない、ラティオスのもう一つの顔である。

「よし！ ラティアスの為にプレゼントでも買うか」

よだれが垂れるくらいの緩みつぱなしの表情で、ラティオスはシヨッピングに出掛ける。まず彼が向かったのは洋服屋だ。

「いらっしやいませ……あらラティオス君じゃない！」

ラティオスが店に入るなりいきなり声を掛けたのは、茶色とクリーム色を基調とした体色でウサギに似た姿をしたポケモンのミニロップだ。

「こんにちはミミロップさん！」

「待ってたわよラティオス君。ほら、注文してた品よ」

ミミロップは店の奥から一着のセーターを持ってきて、ラティオスに手渡す。

「ありがとうミミロップさん！ これは妹が喜ぶぞ」

セーターの出来を見て笑みを浮かべるラティオス。ちなみにセーターにはピンク色で“ラティアス・ラブ”の文字が入っていたりする。

「あとミミロップさん、彼処にある服も何着か下さい」

「はい、ちょっと待っててねえ」

それからラティオスは洋服屋で注文していた物とは別に服を何着か購入、それから別の店にも立ち寄り様々な商品を購入する。

おかげでラティオスの両手には商品が入った紙袋がたくさん……これらは全て、ラティアスの為に購入した物である。

「買い物終了！ 今すぐ帰るからなあラティアス」

ラティオスは満面な笑みを浮かべながら、ラティアスが待つ自宅に向かって飛び立った。

しばらく飛行を続け、ラティオスは大きなビルが立ち並ぶ街から

緑が生い茂る森へとやって来た。

「えっとそろそろ……」

眼下に広がる森を見回すラティオス。そして彼は一軒の木造の家を発見する。

「発見」

ラティオスはその家に向かって降下する。そして家の前に降り立つと、勢い良く扉を開ける。

「ただいまラティアス」

「あつ、お帰りなさい兄さん」

ラティオスを迎えたのは、赤と白を基調とした体色で兄のラティオスと同じく戦闘機に似た体型をしたポケモン……妹のラティアスだ。ラティアスは大掃除をしていたらしく、テーブルの上には本やら食器やらがたくさん並んでいる。

「あゝ可愛い俺の妹よ、ハグしておくれ」

ラティオスは抱きしめようとラティアスに急接近する……が、身の危険を感じたラティアスはこれを回避した。ブレーキをかけることもできず、ラティオスはそのままだから壁に激突する。

「兄さん、そういうのは止めてって何度も言ってるでしょ？」

「痛たたた……そ、そんな冷たい事を言うなよラティアス、本当

お前は可愛い奴だな」

ラティオスにデレデレなラティオスである。鼻の下を伸ばし、顔を赤らめている。

「そんな可愛いお前に、今日もプレゼントを持ってきたぞ！」

ラティオスは先程仕事帰りに買ってきた商品が入った紙袋をラティオスに手渡す。

「何これ？」

「まあ見てくれ」

ラティオスに言われ、ラティオスは紙袋の中を見る。その中に入っていた、例の注文したというセーターを手に取る。

「……………ラティオス・ラブ……………」

それを見たラティオスの表情が引きつる。それ以上言葉が出てこない。

「兄ちゃんがお前の為に特別注文したんだぞ。お前に良く似合っと思っただな」

「うん兄さんありがとう」

ラティオスが語りきる前に、ラティオスは笑顔で受け取ったプレゼントをゴミ箱にポイッと投げ捨てる。

「ってあーっ!? な、なんて事をするんだラティアス!? お兄ちゃんがせつかく徹夜でデザインして特注で作ってもらったこのラブリーセーターを……」

「あんな物を着て、街中に行ける訳ないでしょうがこのシスコン！」

「シ、シスコッ!？」

強い口調でシスコンと怒鳴らたラティオスは両手を床につけ、激しく落ち込んでしまう。ちなみにこのやり取りはこの兄妹にとってはいつもの事である。

「私これから食料を買いに行くから、掃除の続きをお願いね」

まだ激しく落ち込んでいるラティオスは無視して、ラティアスは買い物しに出掛けていくのであった。

S - 1 兄の二面性（後書き）

L i n o

「さて、主人公はラティオスにしたわけですが、彼をチョイスした理由は……」

バクフーン

「L i n oさんの提案で、僕の財布にある小銭の合計金額でやろうという事になりました（笑）」

L i n o

「そしたら581円あったので、81のつくポケモンを探した結果、381 ラティオスが（笑）」

バクフーン

「他にも81がつくポケモンがいましたが、シスコンネタがやりやすいのがラティオスだったので、即決定しました（笑）」

L i n o

「というわけでした（笑）さて次回も……」

バクフーン & L i n o

『お楽しみに〜！』

S - 2 友（前書き）

L i n o

「もう、お互いに休み終わりましたね（汗）」

バクフーン

「そうですねえ（汗）正直もうちょっと休みが欲しいっす（汗）」

L i n o

「年取るって、嫌ですね（汗）でも……」

バクフーン

「頑張るしかないっすな。」

L i n o

「というわけでシスコン、私達にお菓子買ってきなさい。」

ラティオス

「冗談じゃない。誰が……」

ラティオス

「兄さん、私もお菓子欲しいから買ってきて」

バクフーン

「ほら、可愛い妹が頼んでるよ？（笑）」

ラティオス

「よっしゃ待ってる俺の妹よ！」

L i n o

「ヤツがいないうちに本編スタートです(笑)」

S - 2 友

「えっと財布は持っただろ。あと忘れ物は……」

自分の部屋で持ち物チェックをしているラティオス。今日は久しぶりの休日という事で、ラティオスは友達と集まる事になっているのだ。ちなみに昨日ラティオスにシスコンと言われ、しばらく布団にこもりっぱなしになる程激しく落ち込んでいたが、切り替えが早いラティオスはもう立ち直っている模様。

「……よし、忘れ物は無し！　じゃあ、行ってくるよ」

「行ってらっしゃい兄さん」

ラティオスは街に向かって出掛けようとするラティオスを玄関まで見送ろうとする。

「あつ、そつだ……」

何か思い出したのか、ラティオスはUターンして戻ってくる。何だろう、とその行動を不思議に思ったラティオスは首を傾げる。

「可愛い妹よ、出掛ける前にキスをしておくれ」

ラティオスはラティオスにキスを迫る。普通ならこういう場合、妹は兄から逃げ惑うはずなのだが、ラティオスの場合は違った。

「丁重にお断りします」

笑顔でそう言ったラティオスは勢いよく扉を閉める。急すぎる出来事だったので止まる事が出来ず、ラティオスは顔から扉にぶつか

る。
「痛たたた……」

かなり強くぶつかつたせいか、ラティオスの鼻からは鼻血が吹き出す。

「恥ずかしいんだなラティアスは……本当に可愛い奴だよ、全く」
ラティオスには妹に嫌がられてるという考えが全く無いようである。しかしこうして見ると、鼻血を出しながら妹を「可愛い」と言っているこの兄は、ただの変態にしか見えない。

「あつ、約束の時間までもうすぐじゃないか！ 急ぐか！」

腕時計を見て、約束の時間まで僅かしか無い事に気づいたラティオスは大急ぎで街に向かって飛んでいった。

「はい到着つと！」

全速力で飛んできたラティオスは集合時間ギリギリで約束した場所に到着する。そこは“ポケカフェ”と呼ばれる喫茶店だった。

「ようラティオス！」

喫茶店の前ではすでに友達が待っていた。

オレンジ色を基調とした体色でネズミみたいな姿をし、長い尻尾の先端は雷を思わせる形をしているポケモン、ライチュウである。

「ようライチュウ！」

軽く右手を上げて挨拶するラティオス。ライチュウは気づいていないが、この時ラティオスの右手にはまだ鼻血がついたままだ。

「あれ、他の連中は？」

てつきり全員いると思っていたラティオスは辺りを見回し、他に誰かいないか捜す。

「あゝそろそろ来る頃だと……あつ、あんなどこにいたぜ？」

ライチュウが指差す先には、建物の窓に映る自分の姿に惚れ惚れしているポケモンがいた。

「……やっぱ、俺って最高だなあ　このふわふわな美しい毛並み、そして燃え上がるような炎みたいでさ……完璧だ、俺」

自分の容姿を自画自賛しているポケモンは橙色を基調とした体色で、まるで炎をイメージさせるようなふわふわとした体毛を持っている。

名はブースターだ。

「ははは……相変わらずのナルシストだなあいつ」

窓の前で自分に惚れているブースターを見て、ラティオスは苦笑いをする。

「おいブースター！　いつまでそこにいるつもりだ？」

ライチュウが大きな声でブースターに呼び掛ける。

それに気づいたブースターは窓に映る自分を見つめるのを中断し、ラティオス達の所へ駆け寄る。

「悪い、あまりに俺が格好良いからついうつとりしちまってよ」

自分の事を格好良いと言ってしまったブースターは、皆が認めるナルシストなのだ。

「はいはい、お前が格好良いのは分かったよ。えっと……これで俺を含めてブースターにライチュウがいるから3人、あと1人か」

この場にいるメンバーを数えるラティオス。どうやらあと1人足りないらしい。

「お〜い！」

その時、遠くからラティオス達に声を掛けてきたポケモンが1人。両手には大量の紙袋、背中には重そうなりユックを背負ってラティオス達に向かつて走ってくる。紺色を基調とした体色で、王冠を模したかのような嘴くちばしが変形した三つ又の角を持つコウテイペンギンに似た姿をしたポケモン、エンペルトである。

「はあ、はあ……お、お待たせ皆」

かなり急いで走ってきたようで、エンペルトは肩で息をしている。

「ようエンペルト。今日もまた大量に購入したみたいだな？」

エンペルトが両手に持っている大量の紙袋を見て、ラティオスはそう呟く。

「ま、まあね……今日はコミケがあつてさ。そこで先行販売するミロたんのCDやミロたんのサイン入りTシャツとか……他にも色々買ってきたんだ。マジミロたん萌えくだよ」

息を切らしながらエンペルトは説明する。

ちなみにエンペルトが言うミロたんとは、世のポケモン達を魅了する程のトップアイドル・ミロカロスの事である。

外見の美しさもさることながら「萌え」の世界も熟知し、彼女が新しいフレーズを発表する度に、ポケモンの間にはそれが大流行するのだとか。

「お前も相変わらずだなあエンペルト。よし、これで全員揃ったな？ んじゃ、中に入るうぜ」

ラティオス、ライチュウ、ブースター、エンペルトの4人は“ポケカフェ”の中へと入っていく。

「いらっしやいませ」

中に入ると店員のサーナイトが笑顔で4人を迎える。とりあえず4人は適当にテーブル席に座り、コーヒーを注文する。

「そういえばラティオス、見たぜこの前の“ポケキャン”。お前がデツカく表紙に載ってたな。仕事順調そうじゃん？」

席に座って最初に口を開いたのはライチュウだ。

「まあな。そういうお前はどつなんだ？」

今度は逆にライチュウに質問する。ちなみにライチュウの職業は派遣だ。主にコンビニで店長を任される事が多いのだとか。

「俺？ 頑張つてはいるんだけど、どうもなあ……何故か知らないけど、俺が店長やったコンビニは皆潰れるんだよなあ」

腕組みをして首を傾げるライチュウ。ちなみに本人は知らないが、コンビニ界では彼の事を“コンビニ潰しのライチュウ”という異名で呼んでいる。

「何がいけなかったんかなあ？ 精算ミス？ それとも廃棄処分になる弁当を廃棄登録しないで勝手に食った事？ 発注ミス？ うーん……」

自分が今までやった失敗を思い出すライチュウ。よく店長として派遣させるものだと思っ込みを入れたところだ。

「ドンマイだなライチュウ……あつ、ブースターはどうなんだ？」

話題を変えようと、ラティオスはブースターの様子を尋ねる。しかしブースターは返事をしないで、喫茶店にあるテレビをじーっと見つめている。

「ブースター？」

気になったラティオス達はテレビを見る。

そこに映っていたのは、今ここにいるブースターだった。テレビに映っているブースターは目の前にいる子供達と一緒に体操を始める。ブースターの職業……それはテレビ番組で子供達と一緒に体操をする、いわゆる体操のお兄さんなのだ。必要以上にブースターがカメラ視線なのが気になる感じだが。

「はあ……やっぱ俺って最高に格好良いぜ」

テレビに映る自分に惚れ惚れしているブースター。彼は自分にか焦点がいつていないため、周りの子供達が辛そうに、そしてやる気なさそうに呆れている姿が視界に入っていない。

「あつ、そういう事が……そういえばエンペルトは？」

今度はエンペルトに尋ねるラティオス。エンペルトの職業はフリーターで、様々な仕事をしている。

「順調だよ。でもバイトで貯めたお金はコミケの資金とかグッズとか買っちゃうからすぐに無くなっちゃうけどね」

右翼を後頭部に当てながらエンペルトは答える。今日もコミケで給料の1/3を使ってしまったと笑い飛ばしている。

「でも一番の出費は……妹のポツチャマに買うプレゼントかなあ」

急に表情を緩ませるエンペルト。そして妹という言葉にラティオス達は俊敏に反応する。

「妹ってさ、なんであんなに可愛いんだろうな？マジで天使だろ」

「

「そりゃそうさ！ 兄貴に生まれた俺達にとって、妹が一番の宝だからな はあ……俺の妹、ピチューはマジで可愛いぜ？ めいぐるみみたいに可愛いから抱きしめたくなくなっちゃうし」

妹の話にライチュウも食いつく。その時には既に、彼も表情が緩んでいた。

「俺の妹のイーブイなんか、天使を超えた可愛さなんだぜ？ 女神だ女神」

ブースターまでもが表情を緩ませながら妹の事を喋り出す。

「確かに世の中には綺麗な女性はたくさんいる。でもやっぱりさ……」

ラティオスがそう言いかけると3人は顔を近づけ、お決まりの台詞を口を揃えて言った。

『自分の妹が一番だよな』

それからは鼻の下を伸ばし、顔を赤くしながら、4人はそれぞれ妹への想いを熱く語り始めた。

この種族も性格も全く違う4人の共通点、それは妹が大好きだという事である。4人はいかに自分の妹が可愛いのかを、満足するまで熱弁するのが日常茶飯事なのだ。

4人が語り始めてからかなりの時間が経過、明るかった外も少し暗くなってきた。

「今日はそろそろ解散する？」

そう切り出したのはエンペルトだ。時が過ぎるのがあつという間で、まだ満足がいく程熱弁しきれてはいなかったのだが、解散しようというのには訳があるのだ。

「そうだな。妹が待ってる事だし」

もちろん、これである。ラティオスがそう言うと全員で席を立ち、会計を済ませる。

「楽しかったぜ皆。また今度、集まって語ろうぜ」

ラティオスの言う事に3人共頷いて応える。そして……

『妹は俺の嫁』

4人共口を揃えてそんな事を言い出す。これが別れの挨拶なのか、4人は手を振りながらそれぞれ妹が待つ家に帰宅していった。

S - 2 友（後書き）

バクフーン

「シスコンがラティオスだけだと思ってた人も多いかと思いますが……（笑）」

Lino

「実は、他にもいたんですな」（笑）」

バクフーン

「ナルシストなブースター、オタクなエンペルト、コンビニ潰しのライチュウ（笑）あつ、そういえばタイトルのSの意味ですが……」

Lino

「もうおわかりでしょう、Sは“Shi^{シスコン}sukon”です（笑）」

バクフーン

「さて、僕達は彼らを“シスコン同盟”と呼んでいますが（笑）これから彼らはどうなっちゃいますかねえ？（笑）」

Lino

「それは、私達にも全くわかりません（笑）」

バクフーン

「ただ言える事は……温かく見守って下さい（笑）」

S - 3 崩壊（前書き）

ラティアス

「もう、兄さんってなんであなんでしょうね」

バクフーン

「どしたのラティアス？」

ラティアス

「聞いてくださいよ。こないだ兄さん、私の寝ているところに……」

バクフーン

「まさか襲いかかった？（汗）」

ラティアス

「……絵本読み始めたんですよ、『バンちゃんとポツポ』とかいう童話を（汗）」

バクフーン

「え、絵本（汗）しかもどっかで聞いた事あるような名前が（汗）それでどうなったの？」

ラティアス

「登場するポケモンを私たちに置き換えて、式場で誓いのキス……」

バクフーン

「……シスコン度MAXだね君の兄貴（汗）」

「……はいOK！ じゃあしばらく休憩入ろうか？」

「そうさせてもらおう」

今日も“ポケキャン”の撮影を受けているラティオス。バリアードがカメラのフィルムを交換している間にしばし休憩を取る為、近くにあった椅子に座る。そして彼はテーブルに置いてある水が入ったペットボトルを手に取り、一口水を飲む。

「頑張ってるわねラティオス君」

休憩しているラティオスの元に、マネージャーであるノクタスが歩み寄る。

「どうもマネージャー」

いつもと変わらず、ラティオスは無表情で軽く挨拶する。

「今日は、ラティオス君にとっても素敵なプレゼントがあるのよ
はい」

何処か楽しそうに笑みを浮かべながらノクタスは1つの封筒をラティオスに手渡した。

「プレゼント？」

「うふふ いいから、それ開けてみて」

ノクタスに言われ、ラティオスはゆっくりと封筒を開け、中に入っている物を確認する。

その中には、とあるチケットが2枚入っていた。

「こ、これ……最近人気になっている“ポケパーク”のチケットじゃないか！」

中に入っていたチケットを見てラティオスは思わず驚きの声を上げてしまう。“ポケパーク” それはつい最近出来た娯楽場で、様々なアトラクションが用意された遊園地のような場所である。

「手に入れるのに苦労したのよ？ 今日はまだ仕事終わって良いから、ラティアスちゃんと一緒に楽しんでらっしゃいよ」

片目を瞑^{つむ}ってウインクするノクタス。やはりどう見ても には見えない。

「ほ、本当に良いのか？」

「もちろんよ これはいつも頑張ってくれているラティオス君へ、私からの感謝の気持ちよ」

笑みを浮かべ、身体をくねらせながらノクタスは言う。実は彼もラティオスと一緒にいきたいと思っていたりするが、ラティオスに下見させるつもりらしい。

「あ、ありがとうマネージャー！」

マネージャーの前ではいつもクールでいるラティオスだが、今回

ばかりは満面の笑みを浮かべる。

「ほら、妹さんと一緒に早く行ってきなさい。楽しんでくるのよ」

「じゃあ、そうさせてもらつよ。お疲れ！」

早くラティアスと一緒に“ポケパーク”へ行きたいラティオスは、マネージャーやカメラマンに軽く挨拶したらスタジオを飛び出し、全速力で自宅に向かって飛んでいった。

全速力で飛んだ為、僅かな時間で自宅に到着した。
帰ってくるなり、ラティオスは勢いよく扉を開ける。

「あつ、お帰りなさい兄さん。今日は早かったのね？」

ソファアに座り、本を読んでいたラティアスは兄の帰宅がいつもより早い事に少し驚いている。

「当然さ可愛い妹よ　それより本を読むのをやめなさい。出掛け
るぞ〜」

仕事の時とは違い、表情が緩みつぱなしのラティオスはラティア
スにそう言った。

「出掛けるって……何処に行くの？」

首を傾げながら質問するラティアス。だが、兄の事だからまたろ
くでもない場所に行くんだらうと考えていたラティアスは、あまり
ラティオスの答えには期待していない様子。

「目的地は……ここだ」

ラティオスはノクタスから貰った“ポケパーク”のチケットを2枚手に持ち、ラティアスに見せる。

「あつ！ それ“ポケパーク”のチケット！」

「マネージャーがくれたんだ。当然行くだろ？」

ラティオスの問いに嬉しそうにしながら頷いて応えるラティアス。実はラティアス、“ポケパーク”には行ってみたいと前から思っていたのだ。

「じゃあ、早速行くぞ」

「あつ、その前に兄さん！ “ポケパーク”にいる間は仕事の時みたいにクールでいる事、それと私にデレデレしない事。いい？」

出掛ける前にラティアスは兄にシスコン振りを露呈させないために約束させようとする。家なら良いが、他のポケモン達がたくさん集まるような場所で兄にデレデレされるのは恥ずかしいからだ。

「分かったよ。ほら、出発するぞ」

「……本当に分かってるのかしら？」

少し不安になるラティアスだが、今はそれより“ポケパーク”に行ける嬉しさの方が上だった。“ポケパーク”目指して、2人は飛び立っていった。

「おっ、見えてきたぞラティアス！」

「本当だ！ あれが“ポケパーク”なのね」

飛び立ってからしばらくして、ようやく2人は“ポケパーク”を確認する。そこにはたくさんのおポケモン達が集まっていて、用意されている様々なアトラクションを皆で楽しんでいる。

「彼処が出入り口みたいだな。行くぞラティアス」

「うん」

2人は“ポケパーク”の出入り口へと降下する。

「ようこそ“ポケパーク”へ！ では中に入る為のチケットを拝見させて下さい」

受付のペラップがチケットを見せるよう2人に言う。

「ほらチケットだ」

またクールな表情に戻ったラティアスはペラップに2人分のチケットを見せる。

「うん、確かに確認したよ。じゃあこれがパンフレットだよ。では、楽しんできて下さいね！」

ペラップは笑顔で2人に“ポケパーク”のパンフレットを手渡し

た。

「ありがとう。さあ行くぞラティオス」

クールだった表情が一気に緩むラティオス。

それを目撃してしまったペラップは少し驚いた表情を浮かべる。

「あつ、気にしないで下さいね。いつもの事なので……」

苦笑いしながらペラップにそう説明すると、ラティオスはラティオスと一緒に“ポケパーク”の中へ入っていく。

兄の表情が緩んだところを見られて恥ずかしいと思ったのか、若干顔が赤くなっている。

「どうしたラティオス？ そんなに顔を赤くして……あつ、さては兄ちゃんと一緒にここに来れた事が嬉しいんだな？ 全くお前って奴は本当に可愛いな」

物凄い勘違いをしているラティオス。シスコンモード発動である。今の兄に何を言っても無駄だと感じたラティオスは敢えてツッコミを入れない事にする。

「それより兄さん、早くアトラクションがある所に行きましょう。私これが気になるんだ」

ラティオスはパンフレットに載っているアトラクションを指差しながらラティオスに見せる。

「何々……“スノースライダー”か。よし、じゃあ早速行ってみるか」

2人は数あるアトラクションの1つ、“スノーライダー”がある場所へと向かった。

「はい、 “スノーライダー” をやりたい人はちゃんと並んで下さう。足下滑るんで気をつけて下さいね。」

アトラクションの1つ、“スノーライダー” にやってきたラティオスとラティアス。

人気が高いようでポケモン達がたくさん並んでいる。係員のポケモンは皆をちゃんと列に並ばせたり“スノーライダー”の遊び方を説明したりと大忙しだ。

「……あれ？ あの係員もしかして？」

「どしたの兄さん？」

列に並んでいたラティオスは係員をじっと見つめている。それを不思議に思ったラティアスは首を傾げながらラティオスに質問する。

「はいそれじゃあ“スノーライダー”の遊び方を説明するんで皆さんしつかりと聞いて……あれ？」

係員が遊び方を皆に説明しようとしたその時、ラティオスと係員の目と目が合う。

「やっぱりエンペルトか！」

「あれま！ ラティオスじゃないか！」

係員だったポケモンはなんとエンペルトだったのだ。

「お前何してんだよこんな所で？」

「見たら分かるっしょ？ ここでバイトしてんだよ。やっぱ“ポケパーク”だけあって給料が良くてさあ……あつ、やあラティオスちゃん久しぶり！」

右翼を軽く上げてエンペルトは挨拶する。

「お久しぶりですエンペルトさん。大変そうですねお仕事？」

「まあそうだけど、結構やってて楽しいよ。にしてもラティオスちゃん、しばらく見ない間に綺麗になったんじゃない？ ……まあポツチャマの次にだけど」

1番最後の部分だけ凄く低い声でポソツと呟くエンペルト。

「今最後ポソツと何か言わなかったか？」

「いや気のせいだよラティオス。それより、ようこそエンペルトの“スノースライダー”へ！ 今から遊び方を説明するから、ちゃんと聞いててくれよ？」

「説明聞く前に、お前バイトだろ？ 自分の名前をアトラクションに入れて良いのかよ？」

腕組みしながらラティオスは尋ねる。

「良いの！ 僕的には気分が盛り上がるんだから」

「あつ、そう……」

「それより説明するよ？ まあ単純に、ここで特別に用意された氷のコースを滑るだけなんだけど、お前やラティオスちゃんみたいなポケモンにはこちらを利用してもらう」

エンペルトは“スノースライダー”を滑る為に作られた乗り物を持ってくる。

「これに乗って滑るんですか？」

「そうだよラティオスちゃん。あつ、そうだラティオス。実はこんな乗り物もあるんだぜ」

エンペルトはさらに2人乗り用の乗り物を持ってくる。

「こ、これは2人乗り！ エンペルト、お前分かってんじゃないか」

ラティオスと一緒に乗れる……そう考えただけで表情が緩みまくりなラティオスである。

「当然だろ？ さあラティオスちゃん、この2人乗りでラティオスと」

「お先に失礼しまーす」

エンペルトが2人乗りを勧めようとした時、ラティアスは1人乗りで先に滑ってしまった。

「ラ、ラティアス！？ そんな～……」

2人乗り出来ると思ったのに、ラティアスが1人先に滑ってしまった事にラティオスは落ち込んで涙を流してしまう。

「あ～らら…… ドンマイだなラティオス」

「うるせえよエンペルト」

ラティオスはエンペルトの背中をドンと叩いて八つ当たりする。

「ってちよっ！？ あああああ……」

いきなり背中を叩かれた為にエンペルトはバランスを崩して前のめりに倒れ、そのまま滑っていつてしまう。

「なんで兄ちゃんを置いて1人で……あっ、そうか。兄ちゃんと競争しようって事だなきつと！ そうだそうに違いない！ 待ってるよ可愛い妹よ、すぐに追いつくからな！」

ポジティブなラティオスはそう考え、急いで乗り物に乗り込んでラティアスを追いかける。

“スノースライダー”を滑り終えてから、ラティオスとラティオスは様々なアトラクションを体験して“ポケパーク”を満喫していた。

ちなみに結局ラティオスは“スノースライダー”でラティオスに追いつく事が出来なかったとか。

「兄さん遅いなあ……何してんだろ？」

現在はラティオスが喉が渴いたとの事で、妹をベンチで待たせてラティオスはジュースを買いに行っているのだが、なかなか戻ってこないようだ。

「待たせたな妹よ」

ようやくラティオスが帰ってきた。その手にはジュースが握られている。

「ずいぶん遅かったわね？」

「いや、店に行列が出来ててな。並ぶ事になってさ……それより、見よこのジュースを」

ラティオスは手に持っているジュースをラティオスに見せる。

一見普通のジュースだが、ストローが普通と違い、2股になっている。

それを見たラティオスの表情が引きつった。

「じ、これ……」

「一緒に飲もうじゃないか可愛い妹よ」

そう言ってラティオスは一緒に飲もうとラティアスに言う。

「……もう、いい加減にしてよね兄さん！」

ついに堪忍袋の緒が切れてしまったラティアスは怒鳴ってしまう。

「ラ、ラティアス？」

「今までずっと我慢してたけど、私にだって我慢の限界があるんだからね！」

「な、なんでそんなに怒ってるんだよ？」

何故ラティアスが怒っているのか理解出来ないラティオスは首を傾げた。

「自分の胸に聞いてみなさいよ、このシスコン！」

「シ、シスコッ!？」

最後にシスコンと怒鳴ってラティアスは何処かへと行ってしまった。

一方のラティオスは妹にシスコンと言われて激しく落ち込んでしまった。

「……何が悪かった、俺はラティアスが喜ぶと思ってやったのに……」

ラティオスは、大事な妹がいなくなったことで放心状態に陥る。

「ふう〜……いや〜疲れたなあってラティオス？」

そこに休憩時間を貰ったエンペルトがやってきた。放心状態のラティオスを見て少し驚いている。

「ど、どしたの？」

エンペルトはラティオスの隣に座り、一体何があったのかを尋ねる。

ラティオスはエンペルトに今さっき起きた出来事を説明し始める。

「……そんな事があったのかあ」

「嗚呼……俺、なんか悪い事したかなあ？」

何が悪かったのかを考えながらラティオスはストローを口に銜くわえてジュースを飲む。

「あつ、それ俺も飲んで良い？」

「良いよ」

エンペルトはもう1つの飲む所からジュースをラティオスと一緒に飲み始める。「良いよ」とは言ったものの、本当はラティオスと飲むはずだったジュースだからか、ラティオスは溜め息をついて再び落ち込んだ。

「うーん……何が原因なのかわからないけど、とりあえず謝った方が良いんじゃないか？ ラティオスちゃんが怒るだなんて余程の

事だし」

「……だよなあ。よし、とにかくラティアスを見つけて謝らないとな」

とにかくラティアスに謝ろう……そう決めたラティオスはベンチから離れる。

「僕も一緒にラティアスちゃんを捜すよ」

「助かる。俺はパークの南側を捜すから、お前は北側な。見つかったら知らせてくれ」

「わかった」

ラティオスとエンペルトは二手に別れてラティアスを捜す事にした。

ラティアスを捜し始めてから1時間が経過。依然2人はラティアスを見つげ出す事が出来ずにいた。

「ラティアース！ 兄ちゃんが悪かった！ だから、出てきてくれよ！」

ラティオスは大きな声を出してラティアスに呼びかける。だが、ラティアスは現れないどころか返事すらない。

「一体何処行っただんだラティアス……」

「おい、ラティオスー！」

その時、ラティオスに向かってエンペルトが走ってきた。

「見つかったのか!？」

「いやまだだ。警備員の人や仕事仲間にも手伝ってもらってるんだけど……」

まだエンペルトもラティアスを見つけ出せてはいなかった。

「そうか……」

なかなかラティアスが見つからない事に少し不安を感じたようで、ラティオスの表情が曇る。

「し、心配すんなってラティオス。きっとラティアスちゃんは見つかるからさ」

ラティオスを心配させないようにエンペルトは励ます。再び探すうと顔を上げた、まさにその時だった。

「どうやら困っているようだな？ 俺も手伝ってやろうか？」

『えっ?』

不意に声をかけられたラティオスとエンペルト。声がした方に2人が振り向くと、そこには1人のポケモンが立っていた。

S - 3 崩壊（後書き）

エンペルト

「いや〜、やっぱりコミケに行つて良かったな〜」

Lino

「今日も君が愛するミロたんのコミケだったのかい？」

エンペルト

「そうだったんだよ〜 もうミロたん萌え〜だよマジで」

Lino

「あはは（汗）…………ん、その手に持つてるのは何？」

エンペルト

「コミケ限定のミロたん人形ストラップ！ ここにあるボタンを押すとミロたんの美声が出るんだよ〜 一般販売されない超レア物なんだからね 言っとくけど、いくら作者さんでもあげないからね」

Lino

「いらんいらん（汗）」

エンペルト

「はあ〜…………ミロたん萌え〜」

Lino

「…………どうしようもないヲタだな君（汗）」

S - 4 小さい協力者（前書き）

ライチユウ

「うゝん、あれゝ？」

バクフーン

「どしたのゝ？」

ライチユウ

「いや、待ってくれ。「」「」まで……「」「」まで出かかっているんだ！」

バクフーン

「あゝ、何かを思い出そうとしてるのね（汗）」

ライチユウ

「……はっ！？ あゝいや違うか……」

バクフーン

「って思い出したんじゃないんかい！（汗）」

ライチユウ

「そうだ！ 俺今回出番ないんだ！」

バクフーン

「……凄いどうでもいい事じゃゝん（汗）」

S - 4 小さい協力者

「あ、あの……どちらさんで？」

いなくなつてしまったラティオスを捜し回つていたラティオスとエンペルトの前に突如現れた、極端な寸詰まり体型にデフォルメされたようなサメから短い手足の生えた様な外見をしていて、鋭い牙が生え揃つた大きな口を持つポケモン。

一体何者なのかとラティオスは尋ねる。

「あつ、申し遅れたな。俺はこういう者だ」

そのポケモンは1枚の名刺を取り出し、ラティオスに手渡す。
ラティオスとエンペルトは渡された名刺を拝見する。

『私立探偵……フカマル？』

名刺に書かれていた文字を2人は口を揃えて読み上げた。それを聞いたフカマルは頷く。

「そう、俺はフカマル。俺に解けない謎はない。お前達、困つているんだろ？ この名探偵フカマルが協力してやろうじゃないか」

少し偉そうにしながら、フカマルはラティオス捜しを手伝おうと言ひ出す。このフカマルに胡散臭さを感じたラティオスとエンペルトはフカマルに背を向け、互いに顔を近づけてひそひそ話を始める。

「エンペルト、お前あのフカマルどう思う？」

「どづつて……明らかに胡散臭いよあのフカマル。自分で名探偵とか言っちゃってるし」

チラツとフカマルを見ながら、エンペルトは答える。

「俺も同じ考えだ……」

「おい、何2人でひそひそ話してんだ？」

いつの間にかラティオスとエンペルトの側まで来ていたフカマル。いきなり声を掛けられたので2人は驚き、背筋に緊張が走った。

「な、なんでもないさ！ なっ、エンペルト？」

「う、うん！」

苦笑いをしながら2人はごまかす。フカマルは疑いの目で2人をじっと見ている。

「……さてはお前達、俺を胡散臭い奴だと思ったんだろ？」

『ギクッ！？』

フカマルが言った事が凶星だった為、2人の表情は引きつる。

「……まあいい。とにかくお前達、状況を説明しろ。そうでなければ推理出来ないからな」

とりあえず2人は難を逃れることができた。その2人に現在の状況を教えるように言うフカマル。

一瞬考えるラティオスだったが、ラティアスを捜してくれる協力者は多い方が良いと判断。

フカマルに現在の状況を説明する。

「……ふむふむ、なるほどな。つまり、お前が持ってきた2人用のストローが付いたドリンクを見て妹さんは怒り、何処かへと行ってしまった。それで謝ろうと捜し回るが、なかなか見つけれないと……」

フカマルが言った事にラティオスとエンペルトは頷いて応える。

「……この“ポケパーク”はそう広くない。ましてラティアスとなるとかなり珍しいポケモン。そんなポケモンが見つからないとなると……」

『となると?』

2人は推理を始めたフカマルに注目する。

「これは1人で先に家へ帰ったな」

「か、帰った?」

探偵というからにはそれなりの推理をしてくれるかと思いきや、返ってきたのは至って普通の答え。

ラティオスは首を傾げてしまう。

「きつとそうに違いない」

何故か自信たっぷりなフカマル。一体この自信は何処からくるの

であろうか。

「でもラティアスちゃんに限ってそんな事はないと思うけど……」

フカマルの推理に否定的なエンペルト。シスコンならではの勘といふものであるうか。

「ならば俺について来い。“ポケパーク” 出入り口にいるペラップに聞けば分かる事だ」

そう言ってフカマルは“ポケパーク”の出入り口に向かって歩き出した。半信半疑な2人はとりあえずフカマルを追い掛けた。

「何！？ ラティアスは来てないだろ！？」

出入り口にやってきた3人。フカマルは早速ペラップにラティアスが通らなかつたと尋ねたところ、ラティアスは通っていないと答えられた。

自分の推理が外れていた事に思わずフカマルは驚きの声を上げてしまう。

「うーん……兄貴とケンカした妹なら絶対家に帰宅すると思ったんだが……ん？」

その時、フカマルは背中に冷たい視線を感じる。振り向くと、そこにはラティオスとエンペルトがじーっとフカマルを見つめている姿があった。

「あんたに解けない謎はないんだっ たよな？」

「名探偵なんだよね？」

「うっ……そ、それは……」

返す言葉が見つからないフカマルは俯いて黙り込んでしまった。

「おーい！ エンペルトー！」

その時、誰かが大きな声を出してエンペルトに呼び掛けた。声が出た方にエンペルトが振り向くと、エンペルトと同じく“ポケパーク”で仕事をしているバシャーモがこちらに向かって走ってくる姿があった。

「やっと見つけたぞエンペルト！」

「バシャーモじゃないか。一体どうしたんだ？」

首を傾げながら尋ねるエンペルト。バシャーモはかなり慌てた様子である。

「いいから一緒に来てくれ！ 君がラティオスだな？ 君も一緒に来てくれ！」

バシャーモは詳しい説明をしないで2人の手を掴み、引っ張るようにして走り出した。

「ちょ、ちょっとバシャーモ！？ 何処に行くの！？」

エンペルトの問いにバシャーモは答えず、ただひたすら2人を引っ張りながら走るのみだった。

「着いたぞ」

2人はとある建物の中に連れてこられた。そこは“ポケパーク”に設置されている監視カメラの映像を確認出来る場所だった。

「なんでここに？」

訳が分からないラティオスは何故ここに連れてきたのかをバシャーモに尋ねる。

「2人に確認してもらいたい映像があるんだ。これを見てくれ」

そう言っつてバシャーモはコンピューターを操作して、画面にある映像を映し出す。

「あつ、ラティアス！」

思わず声を上げるラティオス。映像にはラティアスが映っていたからだ。どうやらラティオスと別れた直後の映像らしく、ラティアスはかなり怒った表情をしている。

「次が問題の映像だ」

再びバシャーモはコンピューターを操作して別の映像を見せる。その映像には、ラティアスに絡んでいる2人のポケモンが映し出されていた。

1人は大きな顎あごに鋭い歯、長い尻尾を持った翼竜に似た姿をしたポケモンのプテラ。

もう1人はクロヒヨウのような体型と、ラグビーボールを細長くしたような形状の耳、耳とまったく同じ形状をした尻尾。そして体色は黒で体のあちこちに黄色い輪の模様があるポケモン、ブラッキーである。

そして、絡んでいたブラッキーが突然口から大きな泡のような物を吐き出し、ラティアスに向けて放つ。その泡はラティアスの前まで来ると破裂する。刹那せじな、急にラティアスは目がとろんとし、ついにはその場で眠り始めてしまった。

技の1つである“あくび”を使われたようだ。

ぐっすりと眠っているラティアスをプテラが両足でしっかりと掴み、ブラッキーを背に乗せるとそのまま何処かへと飛び去ってしまう。

「じ、これって……」

「どつやら誘拐のようだな」

いつの間にかモニターの前にやってきていたフカマルが映像を見てそう呟く。

「ってお前どつから出てきた!？」

突然現れたフカマルに驚きの声を上げるバシャーモ。

「細かい事は気にするな。とにかく、これは誘拐だ。バシャーモ、すぐに警察に連絡しろ」

「そ、そうだな」

バシャーモはすぐに警察に通報する。この間、ラティオス達は驚きのあまり、立ち尽くしたままだ。

「なんで……なんでラティオスが誘拐されないといけないんだ……」

妹が誘拐された……信じられない事実にはラティオスは放心状態だ。

「妹が心配なのは分かるぞ。だが安心したまえ、警察がすぐに妹さんを捜し出してくれる。それにこの俺、名探偵フカマルが全力で見つけて」

「えーい！俺のギザカワユスで萌え率200%な妹を誘拐するのは断じて許さん！あのプテラとブラッキー……見つけ出したらタダじゃおかん！」

今さっきまで放心状態だった筈がすぐに立ち直り、怒りの炎をメラメラと燃やしているラティオス。完璧にフカマルを無視している。

「つてこら！？俺を無視するんじゃ」

「ラティオス、ラティアスちゃんを助けに行こう！僕も協力するから！」

またもや無視されるフカマル。エンペルトはラティオスを助け出す事に協力するつもりらしい。

「助かるエンペルト。よし、今すぐに行くぞ！」

すぐにラティオスを助けたいラティオスは今出発しようと言いだす。

「ってちよっと待ってラティオス！ その前に1度僕ん家に寄らせて。色々と準備しといた方が良さだろうし、それに妹のポツチャマを1人で家に留守番させる訳にはいかないからさ」

出発する前に家に寄らせてほしいと頼むエンペルト。準備をしたというのもあるが、本音はポツチャマが心配だったりするのだ。

「うーん……分かった。じゃあまずはエンペルトの家に向かうか」

「ありがとうラティオス。じゃ、早速行こうか」

2人は建物から出て、エンペルトの自宅を目指して出発した。

「……だから、俺を無視するな……」

フカマル、残念。

2人が“ポケパーク”から離れてしばらくした時、ようやくエンペルトの自宅へとやってきた。

「じゃあちよっと待っててねラティオス。すぐに準備してくるから」

「分かった」

ラティオスを外で待たせ、エンペルトは家の中へと入っていった。

「ただいまポツチャマ〜 お兄ちゃんが帰ってきたよ〜」

家に入るなり表情を緩ませて自分が帰ってきた事を妹に知らせるエンペルト。これが彼のいつもする事だったりする。

「……………あれ？」

本来だったらすぐに返事が返ってきてポツチャマが出迎えてくれる筈なのだが、どういふ訳かポツチャマは姿を見せず、家の中は静まり返っている。

「ポツチャマ？」

嫌な胸騒ぎを感じたエンペルトはポツチャマを捜し始める。だが、家中何処を捜してもポツチャマを見つけない事が出来ない。

(う、嘘でしょ……………ポツチャマが、いない……………?)

自分の妹が何処にもいない……………予想してなかった事態にエンペルトは言葉を失う。

「おいエンペルト、まだ準備出来ないのか……………ってどうした？」

なかなかエンペルトが出て来ないのでラティオスが家に入ってきた。そして呆然としているエンペルトを見て少し驚いた表情をする。

「ポツチャマが……ポツチャマがいないんだ……」

「な、何！？ おいまさか……」

「そのまさかのようなぞ。近所に住むポケモンが、見知らない奴と一緒にポツチャマがいたところを見たようだし」

ラティオス達の背後から誰かが話し掛けてきた。2人が振り向くと、そこにはフカマルがいた。

「なんでお前がここにいるんだよ!?!」

「細かい事は気にするな。俺はただ、目の前で起きた事件を見過ごせない……それだけだ」

格好良く言うフカマルだが、本当はこの事件を解決してラティオス達から金を貰おうと考えているだけだったりする。

実はフカマル、貧乏だったりするのだ。

「とにかく、お前達の妹は謎のポケモン達に誘拐された。まず犯人の手掛かりを探す為に情報収集をして」

「僕のスーパーウルトラブリーキュートなポツチャマを誘拐するなんて……絶対に許さないんだから！ 行くよラティオス!」

「当然だ!」

フカマルを無視してエンペルトとラティオスは家を飛び出しているってしまった。

「……また無視された……おい待てよお前達!？」

慌ててフカマルは2人のあとを追い掛けていった。

S - 4 小さい協力者（後書き）

ラティオス

「ん、あの敵、どっかで……」

バクフーン

「どうしたシスコン？」

ラティオス

「いやさ、あの監視カメラの奴ら、どっかで見たことある気が……」

バクフーン

「どっかで？ 例えば何処だい？」

ラティオス

「えっ、確か……あいつだ、今日来てないもう1人の作者んとこ」

バクフーン

「あゝ、Linoさんね。うん、確かにLinoさんの所に出てきたね。よく気づいたねえ？」

ラティオス

「ってか、なんで？（汗）」

バクフーン

「新しく敵キャラを考えるのがちょっと面倒だったからレンタルしたのさ（笑）」

ラティオス

「……一発でわかった奴、マニアだな（汗）」

バクフーン

「わかった人は立派なLinnoさん通だよ（笑）」

これからも敵キャラとかで僕やLinnoさんのところで見た事がある
奴が出る……とか出ないとか（笑）」

ラティオス

「マジかよおい（汗）」

S・5 フカヒレ（前書き）

フカマル

「むう」……この謎は……」

Lino

「どうせ解けないんだからやめなさい（笑）」

フカマル

「何を言う！ 俺は名探偵フカマルだ、必ず解いてみせるぞこの謎を！っ！」

Lino

「この謎って……「 $4 + 2 \parallel$ 」……6じゃん（笑）」

フカマル

「な、何故この問題が解ける！？ はっ、貴様まさか何処かで答えを教えてもらったなあ！？」

Lino

「……誰に貴様だと？（怒）」

フカマル

「……すみませんでした（泣）」

S・5 フカヒレ

大切な妹を謎のポケモン達に誘拐されてしまったラティオスとエンペルトは、勝手についてきたフカマルと共に妹を取り返す為あちこちを捜し回っていた……のだが。

「……ラティオス、今ここが何処かわかる？」

「わからないから迷ってんだろ……」

何処までも広がる広大な森、木が密集しているせいか、昼だというのに中はまるで夜のように薄暗い。そんな森の中でラティオス達は途方に暮れていた。何故ラティオス達はここに来てしまったのか、話は数時間前まで遡る。さかのぼ

「ラティオス！ 俺のギザカワユスなラティオス！ いたら返事してくれーっ！」

「ラブリーキュートなポツチャマーっ！ 何処にいるんだーっ！」

ポケモン達がたくさん集まる街中で形振り構わずに妹を捜し回っているラティオスとエンペルト。

そんな2人を周りにいるポケモン達はまるで不審者を見るような目で見つめているが、ラティオスとエンペルトはそんな事を全く気

にせずにひたすら妹の名前を叫び続ける。

「お前ら、ずっとそうしてるのも良いがはっきり言って時間の無駄だぞ?」

両手を腰に当て、呆れた表情でフカマルはそう呟く。

「じゃあ他に何か良い方法でもあるのか!」

自分達がしてる事を無駄と言われムツとしたラティオスはフカマルに怒鳴る。

なんだ、そんなこともわからないのかとフカマルは鼻で笑い、上から目線で助言する。

「聞け、ラティオス。方法ならあるぞ。名探偵であるこの俺の頭脳を使うという方法が」

「ラティオス!」

「ポツチャマーっ!」

フカマルの提案に期待していなかった2人は彼が喋りきる前に再び妹の名を大きな声で叫ぶ。

「ってお前ら、人の話は最後まで聞け!?!」

無視されてしまったフカマルは2人に向かって思わず怒鳴る。

「何俺を無視してくれてんだお前ら!」

「だつてえ、君の推理つてなんか当てにならない感じがするんだもん」

“ポケパーク”でフカマルはハズレの推理をしていた為、エンペルトは彼の推理が信用出来なくなっていた。

エンペルトは目を細め、疑いの眼差しでフカマルを見つめる。

「あれはたまたまだ。とにかく、まずは俺の推理を聞け」

自分の推理をしっかりと耳にするよう2人に言うフカマル。ラテイオス達は「仕方ないなあ」と呟きながら彼の推理を聞くことにした。

「まずお前達の妹さんを誘拐した犯人の気持ちになつて考えるんだ。人を誘拐するという罪を犯した時、犯人はまず人目が付かない安全な場所に隠れようとする筈だ」

『言われてみれば確かに……』

もっともな事を言われ思わず頷いて納得してしまうラテイオスとエンペルト。フカマルの推理はまだ続く。

「となると、人目が付きやすいこんな街中で隠れている訳がない。つまりここには犯人や妹さん達はいないって事だ」

「じゃ、じゃあ犯人は何処にいるの？」

「それはだな……」

エンペルトの質問に答えようとするフカマル。
ラティオスとエンペルトはフカマルに注目する。

「……ズバリ、樹海だ！」

『じゅ、樹海？』

フカマルは自信満々に樹海に犯人達はいると宣言する。ラティオス達は予想外の言葉を聞かされ、驚きのあまり声がひっくり返った。

「間違いなく犯人は樹海にいる」

「なんでそんなはつきり言えるの？」

何故こんなに自信満々に言えるのか、そう疑問に思ったエンペルトは首を傾げながらフカマルに尋ねる。

「犯人は絶対見つからないようにする為に意外な場所に隠れる事がある。まさに樹海は打ってつけな場所なんだ」

『そ、そうかなあ？』

いまいち信用出来ない2人は疑問の声を上げた。

「名探偵の推理に間違いはない！ 樹海はこの街からそんな離れていない、行くぞお前達！」

自分の推理に絶対の自信を持っているフカマルは、樹海目指して走り出した。

「ちよ、ちよつと待てよ!？」

そんなフカマルを慌ててラティオス達は追いかける。こうしてラティオス達は樹海へとやってきて、犯人や妹達を捜している間に道に迷ってしまい現在に至る。

「はあ……もう疲れたよ」

今まで歩きつばなしだった為、疲れ果ててしまったエンペルトはその場に座り込んでしまう。

「参ったなあ……この木が密集してるんじゃないし……」

空へ飛んで森を抜ける道を探そうと考えたラティオスだが、木が密集していて進路妨害している為空に飛ぶ事が出来ない。ラティオスは腕組みをして困った顔つきになる。

「むう……間違いなく犯人達はここにいると思っただかなあ……はっ、まさか犯人達はすでに逃走しているのでは!？」

「いや違つたる絶対」

まだ犯人達は樹海にいてると思っっているフカマルは、すでに犯人達は逃走していると考ええる。

しかしその考えをラティオスに思いつきり否定されてしまう。

「そんな事言つてないで、お前も一緒にこの森からどうやって抜け

出すか考えてくれよ」

「わ、わかったよ……」

フカマルもラティオスと一緒に樹海から抜け出す方法を考え始める。

一方エンペルトは完全にへばって一緒に考えるどころではないようだ。体は立派だが、心の方は弱いみたいである。しばらくフカマルとラティオスが樹海から抜け出す方法を考えていた時、突然茂みの方からガサガサッと物音が鳴り響いた。

「な、何!?!」

物音に驚いたエンペルトは慌ててラティオスの後ろに回り込んで隠れる。

「エンペルト……何俺の後ろに隠れてんだよ?」

「だ、だって怖いんだもん……」

体をビクビクと震わせて怖がっているエンペルト。どうやらエンペルトはかなりのヘタレらしい。

「はあ、しょうがない奴だなあ……」

そんなエンペルトを見て呆れた表情を浮かべるラティオス。そうしている間に茂みから聞こえてくる物音が少しずつラティオス達に近づいてくる。

「……フカヒレーっ！」

突如茂みの中から1人のポケモンが飛び出し、フカマルに思いっきり噛みついた。

「ぎゃあああ〜!?!」

頭を思いつきり噛みつかれたフカマルは絶叫する。フカマルに噛みついているポケモンはオレンジ色を基調とした体色、細長い尻尾の先端は雷を思わせるような形をしていおり、ネズミに近い姿をしている。

『ラ、ライチュウ!?!』

フカマルに噛みついたポケモンを見て、ラティオスとエンペルトは驚きの声を上げる。

そのポケモンは友達であるライチュウだったのだ。

「こいつ、俺から離れやがれ！」

噛みつかれた事に怒ったフカマルはライチュウの足に思いっきり噛みつく。

「痛ててて!?! この、フカヒレのくせに俺に噛みつくとは生意気な！」

「誰がフカヒレだ!?!」

「……エンペルト、とりあえず2人を引き離すぞ」

「う、うん」

ラティオスとエンペルトは噛みつきあっているフカマルとライチユウの体をしっかりと掴み、2人を引き離そうとする。

「俺のフカヒレがーっ！ 放しやがれ！」

フカマルから引き離されたライチユウは暴れ始める。そんなライチユウを落ち着かせる為にラティオスはなんとか押さえた。

「おい落ち着けてライチユウ！」

落ち着くようライチユウに言うラティオス。

「つてあれ、ラティオス!？」

自分を押さえている相手が友達のラティオスである事に今気づいたライチユウは驚いている。

「なんでお前がここにいるんだ？」

「そいつはこっちのセリフだぞライチユウ。お前こそなんでここにいるんだよ？」

落ち着いたライチユウを放し、首を傾げながらラティオスは尋ねる。

「それがよ……俺の妹が……ピチューがいなくなっちまったんだよ」
「何!？」

妹のピチューがいなくなった……それを聞いたラティオスは驚かずにはいられなかった。

「それであちこち捜し回って……気づいたらこの森に来てたんだ」
「そうだったんだ……でも、なんでフカマルに噛みついたの？」

今度はエンペルトがライチユウに尋ねる。

「いや、腹減っちゃまってさあ。それで美味そうなフカヒレだったからつい……」

「だから誰がフカヒレだ!？」

「まあまあ……」

自分を食べようとしたライチユウを怒るフカヒレを宥めるエンペルト。
なだ

「ん? くんくん……」

急にライチユウは鼻をひくひくとさせ、何かの匂いを嗅ぎ始める。

「どづしたの?」

「なんか美味そうないがする……」

美味そうない……それを聞いたラティオス達も匂いを嗅ぎ始める。

「……匂いするか？」

「いや、何も匂わないけど……」

しかし、ラティオス達は何も匂わないらしく首を傾げる。

「いや間違いなくこれは食いものの匂いだ……こっちだ！」

ライチュウは匂いがするという方に向かって走り出した。

「お、おい待てよライチュウ!？」

ラティオス達は慌てて走り出したライチュウを追いかける。

ライチュウを追いかけてからしばらくして、なんとラティオス達は樹海から抜け出して最初いた街に戻る事が出来てしまった。

「やっぱりここからだったか、美味そうない出してたの」

そして今ラティオス達の前には一軒の料理店が存在していた。

「お前はガーディか……」

樹海の中から料理店で作っている料理の香りを嗅ぎつけたライチユウを苦笑いしながら見つめるラティオス。昔から見てはいるが、何回見ても呆れてしまう。

「なあ、ここで飯食ってこうぜ」

「お前なあ……でもまあ、いつか。ちょうど腹も空いてきた事だし……」

ライチユウの提案でご飯を食べる事にしたラティオス達は、店の中へと入っていった。

S・5 フカヒレ（後書き）

ブースター

「あゝ、俺ってやっぱり最高だなあ」

Lino

「出た、ナルシスト（汗）」

ブースター

「ナルシストじゃない、誰もがカッコいいと認める体操のお兄さんだ。見る、この燃えるような美しい毛並み……最高だろう（笑）」

Lino

「ふん、むしつたる（笑）」

ブースター

「な、なんだと！？俺のこの美しい毛並みをむしるといふ事は、世界中にいる俺のファンの女の子達を敵にするという事だぞ！良いのかそんな事になっても!？」

Lino

「いいよ（笑）じゃあちょっとじっとしててね（笑）」

ブースター

「よ、よせ！やめてくれーっ!？」（泣）」

S - 6 悲劇は突然に（前書き）

久しぶりの更新になっちゃいました（汗）

エンペルト

「遅いですよ〜」

ごめんごめん（汗）

お詫びにミロさんの限定等身大フィギュアあげるから。

エンペルト

「ミロたんっ！」

飛びついてきた（汗）

S - 6 悲劇は突然に

妹達を捜している最中に友達であるライチユウと合流したラティオス達。今現在彼らは再び妹達を捜す為、今までいた街を離れてまた別の街へと向かって進んでいた。

「……ねえ、どうしてもここ抜けないとダメなの？」

「当然だろ、ここを抜けるのが一番の近道なんだからさ」

嫌そうな表情をしながらエンペルトが尋ねると、ラティオスは腕組みをしながら答える。

今彼らの前には大きな森があり、ここを抜けると目的地である街に最短で到着出来るのだ。

森を抜けると言われ、エンペルトは深くため息を吐く。前回入った樹海の件があり、出来ればエンペルトは森に入りたくないのだ。

「心配すんなってエンペルト、なんも起きないからさ。それに、森には美味しいキノコとかがいっぱい生えてるしよ」

「キ、キノコ？」

いきなりライチユウに美味しいキノコがあると言われ、エンペルトは首を傾げる。

「キノコって面白いんだぜえ？ この前俺が食ったキノコなんかさ、食った瞬間笑いが止まらなくなっちゃってさ」

「……それ絶対毒キノコのワライタケだぞ」

面白いキノコがあると言って自慢気に話すライチュウに、呆れた表情を浮かべながらそれは毒キノコである事を教えるフカマル。

その半面、今まで死に至るような毒キノコをよく食べずに済んだなど、安心もしている。

「……ま、まあとにかくだ、これも全てパーフェクトに可愛い妹達を助ける為だ。嫌がらずに行こうエンペルト」

「うゝ……わかったよ、パーフェクトに可愛い妹達を助ける為だもんね」

妹達を助ける為、ラティオスにそう言われたエンペルトは森に入る事を決心した。

「よし、それじゃ行こうか」

ラティオス達が森に入った同時刻、ラティオス達が目指す目的地である街にとあるポケモンがやってきていた。

「あつ、お兄ちゃん私これ欲しい！」

店の棚に並んでいる小さなぬいぐるみを見つめながら欲しいと言っている1人のポケモンは、茶色とクリーム色を基調とした体色、ウサギみたいな長い耳と首周りを覆う襟巻えりきのようなフサフサとした毛が特徴的な、イーブイだ。

「イーブイ、さっきも別のぬいぐるみを買ったばかりだろう?」

ぬいぐるみを欲しいと言うイーブイに喋り掛けているのは、橙色を基調とした体色で、まるで炎をイメージさせるようなふわふわとした体毛を持っていて、イーブイに少し似ている姿をしたポケモンブースターである。

「これも欲しいの、ねえ良いでしょうお兄ちゃん」

イーブイは甘える声を出し、^{つぶ}円らな瞳でブースターを見つめながら欲しいと頼む。

「本当可愛いなあお前って奴は……よし、買ってやる! 欲しいもん全部持つてこい!」

可愛い妹に滅法弱いブースターは断る事が出来ず、表情を緩ませながらイーブイが欲しがっているぬいぐるみを買う事を決めた。

そのため、給料の半分以上は妹のために消費されるのだ。毎月送られてくる請求書の山はブースターをいつも泣かせている。

それからしばらくして、ようやく店から出てきたブースターとイーブイ。妹の為に購入した大量のぬいぐるみが入った袋をブースターは首にぶら下げている。

「お兄ちゃん、私今度は彼処に行きたい!」

店から出るなりイーブイはとある方角を見つめながらブースター

に言う。イーブイが見つめる先には女の子が着るような可愛い服がたくさん並べられている洋服屋があった。

「彼処にか？ でも兄ちゃん、そろそろコンテストに行かないと…」

ブースターがこの街に来た目的、それはこの街で開かれる“ポケモンコンテスト”と呼ばれる大会に出場する為だ。

“ポケモンコンテスト”とは自分の美しさや逞しさ、格好良さなど自分の魅力をアピールし、誰が一番魅力的かを競い合う大会だ。そして大会で優勝すると優勝者の証としてコンテストリボンが授与されるのだ。

「私絶対彼処に行きたいの〜！」

しかしイーブイは洋服屋に行きたくてしょうがないようで、ひたすらブースターに行きたいと駄々を捏ねる。

このイーブイ、かなりワガママな性格をしているようだ。本来ならここで妹のワガママを注意し、コンテスト会場に向かうべきなのだが、シスコンである彼の行動はその真逆である。

「もう仕方ないなあ、わかったよ。めちゃんこ可愛いお前の頼みだからな」

妹大好きなブースターは断る事が出来ず、結局洋服屋に向かう事を決めた。イーブイは嬉しそうに「やった〜」と満面な笑みを浮かべて喜んでいる。

そんなイーブイを見て「ん〜プリティ〜」と呟き、ブースターは表情を緩ませる。そして2人は一緒に洋服屋目指して歩き始めた。

「……あれがターゲットだな……見つけたぜ、子猫ちゃん」

だがこの時ブースターは気がついてなかった、遠くから自分達を見つめているポケモンがいる事に……

「わあ、どれもスゴい可愛い」

洋服屋にやってきて、イーブイは並べられている様々な服を見つめている。一方ブースターはというと……

「……いや、やっぱり俺って最高」

店に用意されてある姿見に映る自分の姿に1人酔い痴^しれていた。ナルシスト全開である。

「ねえお兄ちゃん、これ私に似合って……えっ？」

イーブイが服をブースターに見せようとした時、突然1人のポケモンが近づいてきてイーブイを持ち上げる。

紫色の体で両腕に鋭い爪を持った、サソリに似た姿をしたポケモンだ。

「きゃあーっ!?!」

「な、なんだ!?!」

イーブイの悲鳴に驚き、慌ててブースターはイーブイの方に振り向く。

「ターゲット捕獲、逃走開始！」

イーブイをしつかりと抱き締めたまま、そのポケモンは店の窓を突き破って走り去ってしまう。

「お、おい待てよ!？」

ブースターも急いで店を飛び出し、イーブイを連れ去ったポケモンを全速力で追いかける。

「追いかけてきたか……まっ、そりゃ当然だよな。だけど、俺に追いつく事は出来ないけどな……」

追いかけてきているブースターをチラッと見つめ、不気味な笑みを浮かべるポケモン。

そのポケモンは街から離れ、森の中へと入っていく。

「逃がさねえ！」

妹を助ける為必死に追いかけるブースターもまた森の中へと入っていく。

「来たな……おいお前ら！ 出番だぜ！」

先に森へ入ったポケモンが叫ぶと、茂みの中から待ち伏せをしていた複数のポケモン達が一斉に飛び出してきた。

サイドンにゴローニャ、イワークなどの体が大きな岩タイプのポケモン達ばかり。どれもブースターにとって相性の悪い相手ばかりだ。

「なんだお前らは？　そこを退け！」

行く手を塞ぐサイドン達にブースターは大声を出して退くように言うが、サイドン達は虚ろな表情をしたままそこから動こうとしない。

「お前ら、俺が逃げるまでそいつを足留めしとけよ。んじゃ、あとよろしく！」

サイドンにそう言うと、イーブイを抱えたポケモンはその場から走り去ってしまう。

「あつ、待てよお前！？」

ブースターはイーブイを連れ去ったポケモンを追いかけようとす
るが、やはりサイドン達が邪魔をして先に進めない。

「退けつて……言ってるだろ！　火炎放射！」

ブースターは口から高温の炎を勢いよく吐き出し、サイドンにぶ
つける。しかし、ブースターが放った炎ワザは岩タイプを持つサイ
ドンには効果はあまりなく、大きなダメージを与える事が出来な
かった。サイドンは平気そうな顔をしている。

「…………マジで？」

効果はあまりなくても少しは怯むだろうと予想していたブースタ
ーだったが、全く効いてなかった事に驚きの表情を浮かべる。そし
て驚いている間にブースターはサイドン達に囲まれてしまう。

「ちよ、ちよつと待てお前達、俺はカッコいい体操のお兄さんだぞ？ 顔を傷つけるということは世の女性や子供達を敵にまわすことになるぞ。だからな、は、話し合おう！ 話せばわか」

ブースターに有無を言わずサイドン達は一斉にワザを繰り出し、ブースターに直撃させる。

集団攻撃を受けたブースターは耐える事が出来ず、そのまま意識を失ってしまった。

ブースターが意識を失ってからしばらくして、森に入っていたラティオス達が彼の近くまでやってきていた。

「ねえ、まだ森を抜けられないの？ 僕もう疲れたよ」

歩き疲れたようでエンペルトはぐったりと前屈まえかがみになりながらも森は抜けられないのかとラティオスに尋ねる。

「ここまで来たらあともうすぐだ。ほら、頑張って歩け」

「あつ！ 美味そうなもん発見！」

ラティオスが頑張って歩くようエンペルトに言っている間に、ライチュウは何かを発見したらしく、それに向かって猛ダッシュしていく。

その何かとは気絶しているブースターなのだが、ライチュウはまだ気づいてない様子。

「いったただつきまゝす」

ライチュウは確認もせず、ブースターの頭に齧り付く。

「おいライチュウ、ちゃんと確認もしないで森にあるもん食つな…
…ってそれポケモンだぞ!？」

ライチュウが齧り付いているのがブースターである事に気づき、
フカマルは驚きの声を上げる。ライチュウは慌ててブースターの
頭から口を離す。ライチュウのよだれによってブースターの鬚はよ
だれまみれになっていた。

「ってブースターじゃん!? おいどうしたんだよ!？」

たった今自分が食べようとしていた存在がブースターである事に
気づいたライチュウは驚きの声を上げた。

「だいぶ酷くやられているみたいだな…この傷跡からして、どう
やら岩タイプのワザを受けたようだ」

フカマルはブースターの体中にある傷跡を見てそう推理する。推
理という程のものでもないが。

「呑気に分析してる場合か! とにかくブースターを急いでポケモ
ンセンターに運ぶんだ!」

「わ、わかってるさラティオス」

ラティオス達は、傷つき、そして鬚がライチュウのよだれまみれ

になったブースターを運び、急いで街にあるポケモンセンターに向かった。

S - 6 悲劇は突然に（後書き）

これで妹達は全員拐われたか……くくっ（笑）

ブースター

「なんで作者が不敵な笑みを（汗）」

気にしたら負けさ（笑）

今回はどうしようかな？

ラティオス

「決めてないんかい（汗）」

作者にもどうなるかわかりませんよ（笑）

S・7 いざ、行かん(前書き)

バクフーン

「前回更新してから数ヶ月経過……更新遅れてすみません(汗)」
土下座

アブソル

「お前達は何をしていたんだ？」

ドラピオン

「どうせ作者達の事だから、夜遅くまでメールとかしてわいわいや
つてたんじゃねえのか？」

バクフーン

「本当に申し訳……ってちょい待ち、何で君らがここにいるのよ？
(汗)」

ドラピオン

「いたら悪いか？」

アブソル

「今回本編で俺達が出るんだから問題ないだろ？」

バクフーン

「いやそっいう問題じゃ」

ドラピオン

「おっと、長話してねえでさっさと本編に行こうぜ」

アブソル

「そうだな。待たせたな読者の皆、本編スタートだ」

バクフーン

「僕無視っすか（汗）」

S・7 いざ、行かん

「……うっ、うーん……こ、ここは？」

ラティオス達にポケモンセンターへと運ばれたブースターがベツドの上で目を覚まし、ゆっくりと上体を起こして辺りを見回す。

さっきまで森にいた筈なのに、今いる場所は清潔にされた綺麗な部屋。何故自分がここにいいのかわからないブースターは不思議そうな顔をしている。

「あっ、目が覚めたかブースター」

ブースターが目を覚ました事に気づき、今まで看病していたラティオス達がブースターの所へ歩み寄る。

「ラティオス、それにエンペルト達まで……ここ何処だ？ 何でお前らがいるんだ？」

まだ状況を理解出来ないブースター。

そんな彼に、今いる場所はポケモンセンターで、街に向かっていく途中で気を失っているブースターを発見してここまで運んできた事をラティオスは説明する。

「そうだったのか……ありがとな、ここまで運んでくれて」

「友達だもん、当然だよ。ねえブースター、何であんな所で倒れたの？」

エンペルトはブースターが何故森の中で倒れていたのか、気にな

つっていた事を尋ねる。

「それは……ん？」

エンペルトの問いに答えようとしたブースターの目に、窓ガラスに映った自分の姿が入ってきた。

自分の姿を見るなり、ブースターはいきなり叫びだす。

「……あーっ!? な、何だよこれ!? 何で俺のイケてるたてがみがこんなべつとりしてんだよ!？」

本来ならフワツとしている筈のブースター自慢のたてがみ。それが何かでべつとりしていてへなへなになっている。

ブースターのたてがみをこんな風にした犯人であるライチュウは苦笑いを浮かべ、右手で頭を掻きながらゆっくりとブースターに歩み寄る。

「悪いブースター、それ俺のせい。いや、フワツとしてて美味そうな食い物だなあと思ってた……」

「犯人お前かーっ!? って痛たたた……」

叫びすぎてしまい、攻撃を受けて怪我をしたところが痛み出し、ブースターは表情を歪ませる。

まだ完全に回復した訳ではないようだ。

「おい無理すんなよブースター。ほら、横になりな」

ブースターを気遣い、ラティオスは彼をベッドに寝かせる。

「嗚呼、俺のたてがみ……ライチュウ菌ついた……」

「そこまで言うか!？」

「ほらお前ら、話を戻すぞ。ブースター、君は何故あの森で倒れていたんだ?」

先程エンペルトがブースターにした質問と同じ事を、今度はフカマルが尋ねる。答えようとしたブースターだが、見慣れない顔であるフカマルを見てきよとんとする。

「お前誰?」

「俺はフカヒ……ごほん、フカマル、探偵だ。もう一度質問するぞ、何故あの森で君は倒れていたんだ?」

危うく、自分の事を高級食材の名で紹介するところだったフカマルの顔は、ほんのり赤くなっていた。

周囲の者は笑いを堪えていたが、質問を受けたブースターだけはこの事情を知らず、ただ真面目に答えようとしていた。

「それは……」

何故森で倒れていたのか、ブースターはフカマル達に話し始める。街で妹であるイーブイと買い物をしていたら、突然見知らぬポケモンにイーブイを連れ去られた事。そしてイーブイを助けようとして追いかけたら手下らしきポケモン達に攻撃されて気を失ってしまった事を。

ブースターの妹が連れ去られたと聞き、ラティオス達は皆驚きの表情を浮かべる。

(ラティオス達に続きブースターの妹までもが誘拐された……どう

なってる？ 何故彼らの妹が誘拐されるんだ？

右手をあごに当て、渋い顔をしながらこの事件の事を考えるフカマル。

(やはり身の代金が目的で……いや、それならもうとつくに要求があってもいい筈だな。未だに要求がないって事は身の代金が目的じゃないという事だ。となると、彼らに恨みがある者の犯行という可能性が……)

頭の中でどんどん推理していくフカマル。

いつもの外れな推理ばかりしていたフカマルだが、今回は珍しく探偵っぽく見える。

「お前達、誰かに恨まれるような事とか覚えはないか？」

ラティオス達に恨みがある者の犯行かもしれないと考えたフカマルは彼らにそう質問した。

だがラティオス達は恨まれるような事をした覚えはないので、当然全員首を横に振る。

「うーん……じゃあ、今まで妹に近づこうとしてきた ポケモンに何かやらなかったか？」

質問の内容を変えて改めてラティオス達に尋ねるフカマル。
すると、ラティオス達はこの質問に即答する。

「エスパー技で地面に殴打した後、吹っ飛ばした」

「電撃浴びせて水にドボン」

「散々引つ掻いて、それから炎を浴びせて黒こげにしてやった」

「水系の技で溺れさせた後、氷づけにして晒し者にしたよ」

「……それだな」

ラティオス達の答えを聞き、呆れた表情を浮かべながら、彼らに恨みがある者の犯行だと確信したフカマル。

そこでフカマルは、ラティオス達にまた別の質問をする。それは妹達を連れ去った犯人に過去出会った事があるかどうかという質問だった。

過去に出会っているのであれば、ラティオス達に恨みがあつて妹達を連れ去ったという事が確実な物になるからだ。

だがしかし、ラティオス達は妹達を連れ去った犯人は見た事がないと言つて首を横に振る。

「ほ、本当に知らないのか？」

「あんなプテラやブラッキーは知らん」

「俺もイーブイを連れていきやがったあのポケモンは知らねえ」

念の為にフカマルはもう一度尋ねるが、ラティオス達の答えは変わらない。

(うーん、どうやら本当にラティオス達は知らないみたいだな……じゃあ恨みによる犯行じゃないって事か？ なら犯人の目的は一体何なんだ？ むう、ますます訳がわからない……)

難しそうな表情をしながら腕組みをして考え込んでしまうフカマル。

「とにかく、何処の誰かは知らんが俺達のカワユスな妹達を誘拐した犯人は絶対に許さん！ ブースター、お前も当然俺達と一緒に犯人を捜すだろ？」

「当然だラティオス！ 俺のプリティーキュートなハートキャッチ・イーブイを連れ去りやがったあのポケモン……見つけたら絶対に燃やしてやる！」

フカマルが考え込んでいる間にラティオス達は絶対犯人を捕まえてやると意気込んで盛り上がっている。

ラティオス達と一緒にイーブイを連れ去った犯人を見つける為、ブースターは彼らと行動を共にする事にした。

一方その頃、ラティオス達がいる街から遠く離れたとある場所に3人のポケモンがいた。

2人はラティオスやポツチャマを誘拐した犯人であるプテラとブラッキー。

そしてもう1人は全身を白い体毛に覆われ、右側頭部に鎌のように湾曲した黒い角を持っているポケモン アブソルだ。

3人は誰かを待っているのか、しきりに遠くの方を見つめている。彼らのすぐ横では、意識を失って地面に倒れているラティオスやポツチャマ、そしてピチューの姿があった。

「遅いわね……何してるのかしらあいつ？」

「そうイライラしなさんなブラッキー。あいつあ俺と違って空飛べないんだからさあ〜」

他に仲間がいるらしく、ここで合流するようだ。仲間の到着が遅い事にブラッキーは苛立っているが、プテラはそんなブラッキーに陽気に話しかける。

「それに、あんまいライラしてつと老けちまうぜ〜？」

「少し黙りなさいプテラ、いくらあなた達でも容赦しないわよ」

からかうような口調のプテラに、ブラッキーは殺意を込めた鋭い視線を向ける。

「お〜怖っ！ そう睨みなさんなつて、冗談なんだからさ〜」

言葉では怖いとプテラは言っているが、その表情はにやけていてとても怖がっているとは思えない。

そんな2人のやり取りを、アブソルはただ黙って見つめている。

「ありや、もう集まってたか。つて事は俺が最後かよ」

プテラ達の所へブースターの妹を誘拐したポケモン、ドラピオンがやってきた。

ドラピオンは抱えていた気を失っているイーブイをラティアス達の隣に寝かせる。

「残念だな〜ドラピオン。その通り、あんたが最後でっせ」

「ちえっ、一番乗り出来ると思ったんだけどなあ……」

一番最後に到着した事を悔しがるドラピオンにそれを見て面白がっているプテラ。

誘拐という罪を犯したにもかかわらず、彼らからは罪の意識が全く感じられない。

まるでゲームを楽しんでいるようだ。

「……お喋りはそこまでしておけ。これで今回のターゲットは全員捕まえたんだ、ボスの所へ連れていくぞ」

今まで沈黙していたアブソルが口を開き、ラティアス達をボスの所へ連れていくぞとプテラ達に告げる。

「そうね。ほらドラピオン、あなたがこいつら運びなさい」

「はっ!? な、何故に俺が?」

ラティアス達全員を運ぶようブラッキーに言われ、思わず驚きの声を上げてしまうドラピオン。

「あら、到着が遅れたんだからこれくらいの事は当たり前でなくて?」

「頑張れよドラピオン、俺あ空をのんびり飛びながら応援してまっせ」

「……行くぞ」

ラティアス達をドラピオンに任せ、アブソル達は先にボスが待つ場所へ向かって歩き始めた。

不満そうな表情をしながら、ドラピオンはラティアス達を背中に乗せてゆっくりとアブソル達を追いかける。

それから数日後……ポケモンセンターで治療してもらい完全復活したブースターと共にラティオス達は犯人捜しを再開しようとしていた。

だがしかし、再開しようにも彼らには1つの問題がある。犯人達の手掛かりが一切ないという事だ。

「ねえ、犯人達の手掛かりなしでどうやって探すの？」

困った表情でエンペルトはラティオス達に尋ねる。

だがラティオス達も手掛かりなしで犯人達を探す方法がわからず、エンペルトの問いに答える事が出来ない……ただ1人を除いて。

「手掛かりなら自分達で見つければ問題ない。まずは南へ向かうぞお前達」

南の方角にビシツと指差しながら自信満々に答えたのはフカマルだ。

「何で南なんだよ？」

「決まっているだろブースター、名探偵の勘だ」

白い歯を見せ、眩しいくらいの笑顔で親指を突き立てるフカマル。
名探偵の勘……それを聞いたラティオス達は思わず苦笑いする。

「全てこの名探偵フカマルに任せておけ。行くぞお前達！」

「あつ、待てよフカマル!？」

自分の考えに絶対の自信があるフカマルは南に向かって走り始める。

ラティオス達は慌ててフカマルを追いかけていった。

S・7 いざ、行かん（後書き）

Lino

「前回から大分空いてしまって、申し訳ございません（汗）」

プテラ

「何やってんだよ？」

ブラッキー

「ま、この作者達のことだもの、夜遅くまでメールして賑やかにしてたんでしょうね」

Lino

「どうもすみま……ん、何故君らがいる？」（汗）」

プテラ

「何か不満でもあるんか？」

ブラッキー

「本編出といて後書き出番なしなんて、ありえないでしょ？」

Lino

「そ、そついう問題じゃあ……」

プテラ

「……もう眠いな。んじゃ、次回も読んでくれな？」

ブラッキー

「さっ、帰りましょ」

L i n o

「わ、私まで無視ですか(汗)」

S・8 最終回とは(前書き)

バクフーン

「またまた更新遅れてしまって申し訳ないです(汗)」

フカマル

「お前達は一体何してんだ？ これだからマイペースの奴らは……」

バクフーン

「……遅れてしまったお詫びに、皆さんに高級食材をプレゼントしようと思います(笑)」

フカマルを台に拘束、包丁を研ぎ始める

フカマル

「や、やめるーっ！(泣)」

S - 8 最終回とは

「ここか……長かったな、ここに辿り着くまで……」

山を越え、谷を越え、武者修行と暗殺阻止を繰り返すこと早数月。

ラティオス達はずいに、妹達を拐ったボスのところへたどり着くことができた。

ラティオス達の前には大きな城が建っており、城の上空には黒い雲が渦巻き、雷鳴が鳴り響いている。いかにもボスがいそうな雰囲気をかもし出している。

「うわぁ……よくRPGゲームでラスボスが登場する城みたいな感じだなぁ……」

目の前に建っている城を見上げながら、エンペルトはそんな事を呟く。

オタクのエンペルトらしい感想である。

「しかし……何で城の上空にだけ雷雲が？ 不自然過ぎるだろ」

一方フカマルは、城よりも城の上空にだけ渦巻いている雷雲の方が気になるようで、腕組みしながらずっと空を見つめている。

「そりゃフカマル、きつとここにいる敵のボスがすごい力を持つてて」

「何故俺は目立てないんだーっ!？」

フカマルに何故雷雲が城の上空にだけ発生しているか、エンペルトが彼なりの説明をしようとした時、何処からか誰かが叫んでいる声が聞こえてきた。

声がる方にラティオス達が視線を向けると、そこには黄色を基調とした体色で背中には雨雲みたいなたてがみがあり、虎を思わせるような姿をした伝説のポケモン、ライコウがいた。

何に怒っているのか、ライコウは空に向かって「何故俺の出番が少ないんだーっ！」と、ひたすら吠え続けている。

そんなライコウに呼応するように、鳴り響く雷鳴が激しさを増す。

どうやら上空にある雷雲は怒っているライコウが発生させているようである。

『……何だ、ライコウか』

雷雲はライコウが発生させているとわかったラティオス達は、何故彼が怒っているのかには全く興味がないようで、すぐに視線を城に戻す。

「とにかく、あの中にはギザカワユスな俺達の妹が待っているんだ。皆、気を引き締めていくぞ」

ラティオスの言葉に皆頷き、妹達を助ける為に彼らは城の中へと入っていった。

城だけに中は大型のポケモンが何体でも入れそうな程広かった。

「おい！ ここにいるのはわかってんだ、俺達の妹達を返しやがれ！」

城の中に入るなり、ブースターは大きな声でここにいる筈である

妹達を拐ったグループのボスに向かって叫ぶ。
ブースターの声は城中に響き渡る。

「……よく来たなお前達、待っていたぞ」

城の奥から誰かが低い声でラティオス達に喋り掛けてきた。
声が出た方にラティオス達は視線を向けるが、城の奥は薄暗く相
手の姿を確認する事が出来ない。

「お前が俺達のカワユスな妹達を……おい、妹達は無事なんだろう
な!?!」

「心配するな。上を見ろ」

暗闇の中からボスがラティオス達に上を見るように言う。
ラティオス達は上を見上げると、そこには天井に吊された檻
に閉じ込められている彼らの妹達がいた。

妹達の姿を確認したラティオス達は思わず彼女達の名を叫ぶ。

「我を倒す事が出来たなら、彼女達はお前達に返してやろう……出
来るものなら、な? くくく……」

「やってやるさ、行くぞ皆!」

ラティオスの合図と共に、エンペルト達はボスに向かって突っ込
んでいく。妹達を助ける為、最終決戦が幕を開けた。

「はあ、はあ、はあ……さすがボス、ハンパなく強えな……」

ラティオス達とボスの戦いは熾烈しつじつをきわめ、バトルを始めてから数時間が経過していた。長時間に及ぶバトルで体力の限界が近づいているようで、互いに苦しそうに息をしている。

「はあ、はあ……だが、これで最後にしてやる！ 皆、やるぞ！
ラスターパージ！」

「ハイドロカノン！」

「雷！」

「オーバーヒート！」

「竜星群！」

体力の限界が近かったラティオス達は、この一撃で決めようとそれぞれが持つ最強技を最大パワーでボスに向かって放つ。ラティオス達が放った攻撃は全てボスに直撃する。

「ぐおおおお……」

全ての攻撃が直撃した瞬間大爆発が発生、悲鳴を上げながらボス

は消滅していった。

「…………お、終わった…………」

ボスとの長い戦いを終わらせる事が出来たラティオス達は安堵する。

それからラティオスは天井に吊された檻まで飛んでいき、檻を吊している鎖を鋭い爪を使ってやる攻撃技“ドラゴンクロー”で引き裂き、強く念じる事で発動する技“サイコネシス”でゆっくりと安全に地上へ降ろす。そして扉に掛けられていた鍵を再びドラゴンクローを使って破壊し、妹達を檻から解放する。

「兄さん！」

「ラティオス！」

檻から解放されたラティオスは兄であるラティオスに抱きつく。他の妹達も自分の兄に再会を喜んで抱き合っている。中にはキスをしている者までいる。

「怖かったよ兄さん…………」

よほど怖かったようで、ラティオスの胸の中で泣き出してしまっ
ラティオス。そんなラティオスの頭を、ラティオスは優しく撫でる。

「もう心配ない、全て終わったんだ…………さあ、帰ろう。俺達の家へ」

「…………うん！」

最後の敵であるボスを倒し、妹達を無事救い出す事が出来たラテ

イオス達は自分達が暮らす家に帰る為、城を出発した。

それから彼らにトラブルは何も起きず、いつまでも未永く幸せに暮らす事が出来たようである。

『……………そうだったら、良いよなあ』

「あるかよボケ」

ラティオス達が表情を緩ませながらそんな事を呟くと、フカマルが即座にツツコミを入れる。

そう、今までは全てラティオス達の“妄想”だったのである。

現在彼らはボスがいる城どころか近くに街すらも見えない、大きな山の登山道にやってきていた。フカマルの直感で南にやってきたは良いが、彼らは道に迷ってしまっていたのだ。

「そんな妄想してる暇があったらさっさと歩け」

「偉そうに……………誰のせいでこんな場所に来たと思ってんだよ？」

ブースターは道に迷ってしまった原因を作ったフカマルを白い目でじーっと見つめる。

見つめられたフカマルは気まずそうにしながらブースターから視線を逸らす。

「……やっぱりあのフカヒレ食って良いか？」

『食ってよし』

「いや食うな!？」

フカマルの事を食って良いかとライチュウが尋ねると、ラティオス達はすぐに食ってよしと返答する。

当然食われたくないフカマルはこれを拒否する。

「と、とにかくだ！ 俺の名探偵としての直感が南だと告げているんだ！ 絶対に南に何かある、俺を信じてついてきてくれ！」

そう言っただけで必死になりながら、フカマルはまた一人で先に南へ向かって走り出し始めた。

他に当てがある訳でもないラティオス達は、仕方なくフカマルのあとを追いかけていく。

果たして彼らは無事妹達を助け出す事が出来るのか、そもそも南に本当に手掛かりがあるのか、それは誰にもわからない。

S・8 最終回とは(後書き)

フカマル

「はあ、はあ、な、何を考えているんだあの作者は……」

Lino

「あら、どした迷探偵」

フカマル

「あの作者、俺を捌いて読者に配ろうとしてたんだ！」

Lino

「あらあら、痛々しそうなことを(汗)じゃあ、こつしようか」

フカマル

「……ん、何故台の上に縛る!? お前も捌く気か!? (汗)」

Lino

「乾燥させた方が楽だろうし、何より旨味が凝縮されるしいいかと

(笑)」

フカマル

「だ、誰かー!ー! (泣)」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551j/>

The bonds of S

2010年11月13日23時20分発行